

# クラスノヤルスク大学訪問

海 野 八 尋

1999年の9月中旬からおよそ二週間、ロシア連邦共和国のクラスノヤルスク（人口100万人）とイルクーツクを訪問し、現地の大学関係者と交流した。クラスノヤルスクは「独ソ戦」勃発、ドイツ軍の侵攻によって余儀なくされた軍需工場移設と軍事技術開発によって発展し、ソ連体制崩壊まで「秘密都市」に指定され、外国人の訪問が禁止されていた。筆者は彼の地には前から関心があり、機会があれば訪問したいと考えていた。今回クラスノヤルスク大学から州政府承認の招待状を受け、経済学部で集中講義を行い、外国語学部で日本の大学への留学についてのガイダンスを行った。また観光や歓迎レセプションは辞退し、筆者が希望して工場、学校、福祉施設も訪問した。今回もいろいろな意味で有益な訪問であった。クラスノヤルスク滞在期間中の見聞を紹介し、諸氏の参考に供したい。

13日、新潟を定刻を30分ほど過ぎて16時近くに頃離陸。金沢―新潟間の鉄道の連絡は悪くなる一方で、辛うじて出発時刻に間に合ってほっとしたが、大勢のロシア人が抱え切れない大量の荷物を持ち、出国手続きがおくれ、実際には余裕の出国となった。出発時、重量超過ということで8,000円ほどの追加料金を徴収された。搭乗業務を代行する日本航空職員の話では、重量超過分はきちんと徴収してくれと言われているそうだ。今までにないことで、ちょっとひっかかったが、これが以後付いて回った。

現地時間で20時頃ハバロフスク到着。実際搭乗時間は3時間。入国手続きでは面倒がなかったものの、いつもの通り早速問題が生じた。航空券、宿の手配は予算の都合で全部自分でやるつもりでいたが、クラスノヤルスク大学より同空港へ「大学関係者」が宿の手配をし、出迎えにもくると事前に連絡があった。

自前で宿の手配を考えたのは、日本から旅行社を通じて予約できるインツーリストホテルは高く、サービスが良くない。一般のビジネスホテルならば100ルーブル（9月のレートで換算すると邦貨で500円弱）以下で泊れる。環日本海国際学術交流協会の支援を戴いているとはいえ、経費節減をせざるを得ないので、これでいこうと考えていた。ところが、クラスノヤルスク大学がハバロフスクのホテルの予約と出迎えをやるという。ロシア初心者ではないから、疑いを抱きつつ、ちょっぴり期待もし（安くあがったら嬉しい限り）出口をでて、出迎えのロシア人女性タチアナさんの用意した車（大学の公用車と運転手）にのって話をしているうちに事情が判明してきた。「お出迎え有難うございます」、「いえいえ、これも仕事ですから」。「なに？」。もしかすると、という予測が当たって、着いた所は泊りたくなかった「インツーリストホテル」！ 宿泊料金は2,000ルーブル（1万円）！。出迎え料が80ドル（1万円）。ほとんど「詐欺」だ。頼んだ覚えはないのに、サービスが押しつけられる。しかも、ルーブルが半減したがルーブル建ての料金はその分引上げられていた。またいつものように、市場経済の「活用」ではなく「悪用」。後でわかったことであるが、この出迎え料は出迎えに着たハバロフスク工科大学とクラスノヤルスク大学で山分けすることになっていた。早速予算計画を変更する羽目になった。円相場は相変わらず国際相場の25%安。このレートは尋常ではないが、日ロ両政府とも放置して置いて良い程度の取り引きしかない、ということ。ロシア／東欧圏ではドルとマルクが圧倒的に幅をきかせる。為替管理が出来ていない93年当時、町中で円が使用できたが、この時のレートはシベリアでは公式レートと違いほぼ国際相場であった。

さてホテルの内装はイルクーツクのインツーリストホテルに比べるときれいであったが、部屋の窓がきちんと閉らず、夜中に寒くて何度も起き、完全に睡眠不足。それでも暖房が利いていたことを喜ばなければならないことを後で知ることになる。翌日の朝食は例によって例のごとし。コーヒーは前から疑問の正体不明のインスタント飲料のなにか。色も香りもコーヒーではない。朝食セットより個別に注文した方が良く、と前日フロントで聴いていたが、それはホ

テル側には良いものという意味であることがわかった。セットでは分量が多すぎるので、必要な分だけ注文したところ逆に料金は高くなる仕組。これもペテンに近い。食堂従業員のつくり笑顔だけがサービス。

14日。クラスノヤルスク出発は夕方なので、日中はハバロフスク市内を見物。安くておいしいという店を教えてもらい、昼食。昔はレストランがほとんどなかったの、旅行者はホテルの食事を強制されたのであるが、その頃に比べると店は当然増えている。安いといっても通常100ルーブル以上はかかるので、外国人にとってはたいした金額ではないが、月収1,000～2,000ルーブルの普通のロシア人にとってはそうとう高い。以後、いつも通りこの平均的所得水準で物価を計ることになるのであるが、とにかく高い。毎日レストランにやって来る人は普通の人ではあるまい、と周囲のロシア人を見ながら思ったが、普通のロシア人はたまに来て大事な時間を過しているのかもしれない。アエロフロートの営業所でクラスノヤルスクまでのチケットを購入。現地価格のせいか、距離の割には安い。2,000ルーブル弱（80ドルくらい）。ここで「チケット用紙代」20ルーブル！というのをはじめて請求された。航空券は運賃と用紙代の合計である！

インツーリストホテルに戻り、店員の嫌な顔にめげず紅茶一杯でホテル内のカフェで出発時間まで粘って待機、忘れたロシア語文法のにわか復習。「外国人だから文句が言えないのだろう」とオリガさんが解説。他のロシア人はすぐ追出される。夕刻、空港へ出迎えに来たタチアナさんの案内でハバロフスク空港へ。ここで実に面白い体験をした。まず、機内持込みの手荷物まで含め重量計算し、追加料金をしっかり課された。ザックやウエストバッグの重量まで計ったのである！我々二人ともかなり細い体である。計るなら体重毎計らなければ不公平ではないか！加えて、空港使用料金も。これははじめてのことで、事情が分からない。タチアナさんも？状態。しかし、とにかく請求されているのでカウンター横の部屋の中で払った。一人140ルーブル。次の問題は重量超過分の支払いは違うところで払う、ということであった。どこで払うのか案内もないが、とにかく外というので外に出て30メートルほど歩き、別の建物の二

階に上がり、支払う。約200ルーブル。航空券、超過料金支払い証明、空港使用料支払い証明を見せて、いよいよ搭乗。搭乗口には我々しかいなかったが、乗る段になるとどこからか人が一杯やって来た。なんと、外国人とロシア人の待合い所は別であった。付添のロシア人がいても出発まで一苦労。通訳のオリガさんも訳が分からない。初めて一人でロシアの国内旅行をするのはなかなかの冒険になるという実感。後で聞くと、おそらく空港使用料は外国人だからとられたのであろうということ、また手荷物は計量する空港職員に見せず、隠しておいて、搭乗する時に持出さないと駄目だそうである。諸氏、覚えて置いて欲しい。出発前に、息子が日本人と結婚し日本企業で働いているというロシア人の依頼でクラスノヤルスクに住む彼の親類へのお見舞いの届けものを依頼される。日本が大好きという彼、私が日本人と知り、にこにこして彼の希望を取次ぐ空港職員、私から金を巻上げる空港職員。別人であるが、皆ロシア人である。

1時間20分の短いフライト後、21時過ぎにクラスノヤルスク空港着。ここも手続きは簡単。ここでクラスノヤルスク大学日本語講師の金倉孝子さんの迎えを受ける。大学の車と運転手が待っていたが、念の為確認したところこれは無料。不審顔の金倉さんにハバロフスクの事情説明。今回の訪問を準備してくれた彼女はびっくり。彼女の知らないところでビジネスが行われたのである。高緯度のせいでまだ明るい中を大学宿舎へ。空港からの道は1997年の橋本一エリツイン会談のせいでロシアにしては珍しく突貫工事で整備されたという。学生寮最上階に豪華な特別宿舎が用意されているということでちょっと楽しみであったが、過大な期待を持たない、何があっても冷静に、という体験で確立したロシア／東欧旅行原則に従う。確かに改装直後のきらきらの部屋が用意されていた。しかし、暖房はなく、湯は当分出ない。幸い今年のシベリアでは八月が低温であったが訪問時には気温が上がっていた。それでも毛布一枚ではいかんともしく、厚着をして寝たが、これ以降滞在期間中熟睡することはなかった。オリガさんの部屋にはその毛布もなく、シーツのみ。翌日の交渉で毛布は2枚になったが、それで終わり。担当の女性寮監、「がまんしなさい」。この女性に

も毛布がないなら文句も言わない。しかし、膝かけはあるし、電気ストーブを使っている。翌日大学関係者に状況を訴え、皮下脂肪の少ないオリガさんには電気ストーブを借受。200ボルトは強力で、部屋の暖房にかなり効果があったよう。

翌15日。炊事施設は有るが、食材がなく、宿舎での朝食はなし。副学長のペトリエシエヴ国際部長（教育学博士、国際経営学科学科長）と会談。持参した重い九谷焼大皿を進呈。訪問の意図を告げ、先方の学術交流方針の説明を聴く。彼は英語を使いたがるので、英語に切替え。イルクーツクでは英語を話す経済学者に会えなかったのが、これは好都合。しかし、直に話せるのは良かったが、話せることを自慢しがっている雰囲気がある。話が少し込入って来ると、こちらの話が通じず、オリガさんの助けを結局借りることになる。優秀な通訳が居るのに無理をしている。通訳のオリガさんは英語が堪能であることを彼は知らない。有能であると誇示し、他人に劣ることを認めるのは恥じと考える文化があるとロシアからの留学生からきいていたが、その一例。もちろん全部のロシア人がこうではない。予定されていた学長訪問、州政府訪問は全部中止とのこと。こちらが希望していたことではなく、ク大学が作成した予定表にあったことなので、なくなって構わないが、説明はなし。会談後、大学の教員食堂で朝食兼用の昼食。街のレストランより安く、一人50ルーブル位。メニューは少なく、毎日同じなので、以後選択に苦しむことになる。大学の食堂はいつでも同じか。後、授業開始。当初は講演ときいていたが、実は公式の講義であった。

学生は経済学部所属の上級生約100。日本人の講義ははじめてということからか、好奇心一杯の顔。講義題目は第一日目はグローバリゼーションと規制緩和／バブルとその崩壊のメカニズム／長期不況に苦しむ日本経済について。労働組合や市民団体で話す程度の水準の講義。日本や世界の経済についての知識や情報が蓄積されていないと判断して、説明はかなり丁寧なものになった。学生の反応からこれまで訪問したどの大学よりもその知的水準は高いと感じた。しかし市場経済のメカニズムについての知識は不十分で、その後のやり取りで私の講義を理解するのに必要な経済学の知識も十分ではないことがわかった。

4 時間にわたる 1 回目の講義がどうやら終了。講義中が血圧が上がり、鼻血が出て来て往生した。睡眠不足のせい。途中から別の授業があるという三年生が退席したが、残った四年生がこの日後半と翌々日の講義にも出席した。

17日の後半の講義は予定を変え、ロシア経済の現状分析と危機打開の経済学的処方箋に言及した。この部分に学生は強く反応し、多くの質問がでた。私の講義は、マクロ的需給関係式からロシア経済の現状を描きだし、ソ連時代と現時点のロシア経済の問題点の発生根拠、因果関係、その解決方向を経済学的に与えたものである。講義後 1 時間以上学生と質疑応答を続けた。学生たちが、「聴いたことがない講義で、大変参考になった」と口々に言ってくれたことは嬉しく、学术交流の意味があったと大変満足した。彼等は「現状の打開策がわからなかった、それが有るということがわかった」とも言っていたが、どんな悲劇的状況にも策はある。最後の質問は、「先生はこの国が再生することができると思うか」という、ある意味では大変哀しいものであった。私の答えは、「以上の説明の通り、放任された市場原理や恣意的な規制に任せない正しい経済学的対策はある。しかし、その政策が採用されるかどうかは政治の問題である。ロシアが政治と社会の民主主義をどこまで実現するかは経済学者には予想できない。ロシア人の実践次第である」。北方領土問題についても質問がでた。さすが、エリツイン—橋本会談が行われた都市の学生である。私の説明は以下の通り。①徳川幕府とロシア政府の条約で樺太はロシア領、全千島は日本領に平和的に確定した。したがってポツダム条約の適用外。②南樺太領有は日露戦争による非平和的なもの。③ソ連軍の全千島占領はポツダム条約違反であり、しかも終戦後のこと。千島はロシアで言われているようなロシア人が血を流して得た領土ではない。また南千島の人口は少なく、一部は無人島である、④日本政府は全千島ではなく四島の返還しか求めておらず、ロシア人の残留、対口援助を申出ており、それ以上の譲歩は有り得ない。⑤四島の返還それ自体で日本が得る経済的メリットは何もない。このため財界は四島返還問題に関心が無い。しかし政治的には未返還が対口経済交流と親善の決定的な障害である。

これに対し、ある学生が、次の様に質問し、私の答えを待って教室がシーン

とした。彼曰く、「それでは先生はロシア人の誇りを金で売れ、というのか」。私の答え。「そう言っても良い。極小の四島保有はロシアの誇りにもならないし、メリットもない。日本にとっても経済的には輸入の蟹が国産になるという程度の意味しかないのに日本政府は金を払うと言っており、企業はロシア進出の障害がとれる。未返還はロシアの利益を損う。ロシアから見れば、返還には客観的に何のデメリットもない。アメリカは反核・反戦・反米感情を考慮し沖縄を返還し、米日関係と米軍基地の維持に成功した。ロシア軍の基地もない四島の返還で日本国民の対ロ感情は劇的に変わるだろう。ロシアの外交戦略はアメリカに比べると未熟だ」。

私の講義を理解する知性が有り、他方こうした講義ははじめてというのならシベリアで二番目にランクされるというこの大学で何が教えられているか、ということが問題になる。後日の経済学部長との懇談で明らかになったように、ソ連崩壊後の市場経済化に対応して、この大学でも問題を感じながら経営実務と新古典派の経済学を教えている。ロシア経済を対象とする政治経済学の講義はないし、多くの学者は現実について講義の場では語らない。ただモスクワ、サンクトペテルスブルグ、ノボリシビスク、クラスノヤルスクの大学出身者の政治的関与はかなりあるし（ペレストロイカ原案はノボリシビスクで作成された）、ク大学当局者も権力との近い関係について述べていた。エリツィンの対抗馬で、民衆の人気の高かったレベジの急な州知事選挙立候補によって敗れた前州知事が学長である。ついでながら、私に講義を依頼した経済学部関係者は私を学生に紹介しただけで退室してしまい、私の講義内容は教育スタッフにはまったく伝わっていない。講義の後、金倉さんは、招待しておきながら失礼だ、研究者こそ聴くべきだと憤慨していた。筆者には何とも言えない。

講義前半を終了後、食糧をスーパーで買い（商店は多く、イルクーツクより清潔な外観、品物も揃っている。袋類持込み禁止）、金倉さんお勤めのレストラン（ユーゴ人経営）で夕食。ロシア料理ではなく、味はロシアの基準で考えれば良い。分量は例によって多い。食後は、近くの金倉さんのアパートで久しぶりのシャワー。洗髪をし、体に温水をかけたら疲れがいきなり出た感じ。タ

クシーをひろい、オリガさんのすばやい値段交渉、40ルーブル（これは安い）で大学宿舎に戻る。

16日。午前中は国際部担当職員から大学案内を受けた。やはり、工学系の水準は高そう。市内の他の国立研究開発機関と共同して作成し、打ち上げたものと同じという人工衛星がホールに取り付けられていた。ロケット、人工衛星を直接取り扱う領域は金沢大学にはなく、これを含めてク大学との学術交流の意義は大きいと判断した。橋本会談後の日本政府からの寄付として学内に茶室の建設が進んでいた！ 何とということ。日ロ交流のために今必要なことは現在の両国民の現実の姿／生活を伝え合い、可能で有効な交流を急ぐことではないか。エキゾティシズムを刺激した交流が外務省の文化交流行事として依然幅を効かしている。定番の寿司とてんぶらの講習・食味会、日本舞踊と伝統音楽の夕べ。理解できる学生（教員も）いないのに夏目漱石や森欧外の小説の用意。思わず、日本語処理能力の無いパソコンなどももらわないように、と忠告してしまった。実はこれは無意味な忠告である。ロシアでは日本以上に下級職員に発言権はない。

コンピュータールームには15台ほどのパソコンが用意されており、担当者によれば、学生が（2時間以内）自由に利用できるということであった。後で聴いてみると、登録された学生に限りという条件がつく。ラインは込み合っており、金大のホームページにアクセスしようとしたが、10分経っても駄目なので諦める。英語バージョンがあるので見て欲しいと要望はしておいた。

経済学部長ブハロヴァ・イヴゲーニア助教授（社会経済計画学科所属、計量経済学専攻、女性）と学術交流について意見交換をした。筆者は、金沢大学、経済学部の学術交流の方針と現状、文部省・外務省（国際交流基金）の制度について説明した。彼女は、現実的な効果のある交流をしたいので学部間協定締結の公式の申入れを後日行いたいと述べた。筆者は、学生交流は否定しないが、日ロ経済の分析を含む研究面での交流がなければ交流が継続しないという意見を伝えた。研究教育スタッフが自分の要求として交流の必要を感じなければ、交流は儀礼的なものに終わる。



日本語学科のある外国語学部のラズモスカヤ学部長（女性）と会談。日本の留学生受入れ制度について説明。通訳は金倉さんが行ってくれた。この後、企業訪問に出かけた。タイヤとスフの製造会社。妙な組合せに思えるが、タイヤに繊維を入れて耐久性をだすのでこういう組合せが成立つ。会社側の説明は以下の通り。スフ製造設備は大変古く、最も古いものは稼働停止。しかし、改良しながら採算ベースを維持し、良質のものは日本、次は韓国、それ以外は中国に輸出。決済は現金のみ、したがって不良債権はゼロ！ 業績は好調。賃金は、作業長クラスで2,000ルーブル。日本の提携企業の援助を受けて設備更新を計画中、スフの需要には限界があり日本企業の支援を受けて新素材（アミッド繊維とそれを使ったタイヤ）の生産を実現する計画を実行中、社長が日本訪問を終えたばかり。男女二名の幹部（副工場長と経理担当）は問題点も率直に話す。幹部の説明や質問への回答は明快。保健衛生上問題のある労働環境にもかかわらず、現場を見せる。「英語が話せる、自分で説明する」と私にアピールした（確かに英語の単語を発音した）軍人出身の職制（軍服着用）が跳ね回るような足取りで現場を案内してくれた。市場経済化へ対応する新しい経営者の存在を確認できた。対応できない企業も訪問したかったがこれは紹介もなく、時間切れ。

夜は、日本語学科最優秀という五年生ターニャさんのお宅に呼ばれ、家庭料理を満喫。レストランの食事よりおいしい。両親は驚くことに、合気道の愛好家。一部屋にマットを敷き詰め、練習場所にしていた。この部屋には観音教の経文が掛かっていたが、もちろん筆書きのその文章の意味は彼らにはわからない。筆者の解る範囲で説明した。

17日。施設・学校訪問。最初はいわゆる孤児院。本当の孤児と親に養育を放棄された子供たちの施設。平日なのに着飾った子供たちの歌とダンスの精一杯の歓迎にびっくり。午前中であるが、学校が二部制になっているため、登校は午後の児童が施設にいるという説明。外国人が訪問することはなかったということで、子供たちがそばから離れない。筆者の訪問でも彼らの楽しみの材料の一つになってくれればうれしい。設立はソ連崩壊後と言うが、建物は古い。質

素ではあるが、清潔な施設。訪問と聞いて徹底的に掃除した感じ。50人以上の常勤、非常勤の職員が居るそうだが、目にしたのは賄いを含め、20人程度。平均賃金は1,300ルーブルと低い。しかし職員はよくやってくれていると所長は言う。所長はじめ職員のほとんどは女性。「施設内での虐待等ということはないが、施設になじめずストリートチルドレンになってしまう子供がいる。資金不足に悩んでいるが、周囲の援助も受けてなんとかやっている」。見送りを受けてク大学付属小中高等学校へ。

建物は大きい、他のソ連時代の建築物と同様箱そのもの、安普請の感じ。しかし、十分な広さ、清潔さがある。一学級20人程度の編制（教室の机の数もそれに一致）。創作活動が盛んなようで、出来の良い個人・共同作品が廊下や壁にたくさん展示してある。力の入った先生の説明を聞く。英米の財団からの助成（英語資料の提供、教員の研修招待）が行われていた。日本でも個別の学校にまで効果のある援助が政府、民間のレベルで行われるようになってはいるが、まだ始まったばかり。さすが新旧覇権国。以下、学校幹部からの聞取りの内容。

基礎学力の獲得と創造力の養成を心掛けている。日本のような学級崩壊、いじめ、おちこばれ、幼稚園からの受験戦争・塾通いという現象はない（こちらの話に目を丸くし、「それは教育とは言えないのでは」と言っていた）。人口の少ない農村部の学校が資金不足で相当数閉鎖された。他の学校と比べると恵まれているものの、予算不足（低賃金で若い先生にはアルバイトを認めている）、生徒の経済条件の較差拡大に悩んでいる。指導部はク大学の教育スタッフを兼ねており、高校生の授業を大学教員が受持つこともある（これはイルクーツクの学校で聞いたことと同じ。普通の学校とそういう点が違う）。

途中ビスケットとお茶をいただき、昼食代り。良い勉強にはなったが、少々疲れる。この後、前述の講義後半。疲れ切って国際部のオフィスに戻る。宿舍料と航空券代金を清算。当初告げられた金額より安く、宿泊料は一人一日500ルーブル程度で済んでほっとした（従来イルクーツク大では無料）。講義後に夕食がレストランに用意してある、という。ようやく食事のご招待と喜んだが、

大学関係者は出ないと言う。妙に思いながらも、おごりだおごりだ、ワインも飲もうと食堂に行くと国際部の連絡でメニューが決っていて、選択できないという。ワインも無い。疲れているし、空腹だし何でもOKという気分。しかし、請求書がしっかり来た。自分で払うなら別なものが食べたかった、街のレストランの方が良かったと思ってももう遅い。

18日。イルクーツクへ向けて移動。現地滞在後、また重量超過分の支払いを済ませ（ルーブルとの交換場所は出国手続き、搭乗手続きとは違う場所にあるので、手続きの途中で場外に出て、交換に行かなければならない）、最後の航空便で新潟着。おりからの台風で汽車は全面運休。レンタカー会社の忠告を振切り車を借り、高速をとばして帰沢。

今回のクラスノヤルスク訪問は、大学での講義が中心で市街地を見学して回った訳ではなく、なにかを論評できるほどの情報を単期間のかぎられた見聞で得られたわけではない。また例によって大学に統計的資料がなく、地域統計から様子を伺うことも出来なかった。ルーブル暴落の影響で、国内企業が復調傾向にあることは商店の品揃えに国産品が増えたことでわかるし、現地の人々もそれを認めていた。イタリア、フランス製の普通の合織のワイシャツは国産品の約9倍（1,000ルーブル＝5,000円）であった。もの珍しさが勝った時期が過ぎたということもあろう。また西側のモダンなデザインの取込みも進んだので、輸入品との表面的差異が小さくなったこともあろう。市場経済化はさらに進行しているが、インツーリストの例のように独占の弊害は大きく、法的規制も対抗力の形成もまったく進んでいない。ルーブルの下落に合せ観光客を引寄せ、受入れ施設の建設投資を進めれば当然大きな経済効果が生まれるのであるが、逆に下落分を価格に転嫁してしまい、この点でのメリットを生かすことが出来ない。自企業の利益だけを排他的に追及するミクロ経済が支配的で、先を見通したマクロ的経済政策がない。大学の経済学者たちの多くは経済学の研究や教育ではなく、市場経済実務の教育とその学習（彼ら自身が英米経営学を学んでいる）によって地位を維持している。労働者の実質賃金は、名目賃金が物価ほど動かずまた低下傾向にある。普通の人々はしたたかに生きてはいるが、依然

重苦しい生活を強いられている。経済学者としては極めて興味深い観察対象であるが、見る度につらいのも今までと同じだ。しかし、今回の訪問も意味があった。筆者の問題提起に反応してくれる人々が現地にいるかぎり要請があれば出かけていこうと決意させてくれる旅であった。